

校 歌 に つ い て

作詞者のことば（要約） 瀬戸哲郎

校地と校舎を見て一番先きに受けた感じは、
先人ねむるみどり野 であり
豊かなる郷屯田 でありました。

しかも手稲の山々には、はるかに雲が浮かび、
発寒川、伏籠川がこの辺一帯を流れつつ、この地
域をうるおしている。実によい教育環境であるな
という感じでありました。

本校の正面には太い柱で飾られた堂々たる玄関
があって、この正面の堂々とした感じを

いらか巍々たりわが校舎

いらか巍々たりわが丘べ

と、一番二番に並べました。いらか巍々たりとい
うのは屋根が山のように高く大きくて建物全体が
立派な様子をたとえた言葉であります。

次に、校名の北陵が「北海道の最高峰を志向し
て立派な学校に生々発展してほしい」という願い
をこめたものであることからして、北陵高校は
「未来に開かれた宮」であり、従って皆さんには、
未来を開いていくのに十分な抱負、未来を開いて
いくことのできる十分な個性、未来を開いていく
ための不屈の精神が期待されると思います。

最後に北陵高校の若い皆さんは、高校における
3年間を人生の基盤として、夢おおく、えい智に
もえて、感激に生きていかれるよう心から期待い
たします。

作曲者のことば（要約） 横谷 瑛 司

メロディーは音楽の顔であるといわれている。
ベートーベンにしろ、モーツァルトにしろ、作曲
家にとっての主たる関心の的は調性の機能と展開
であった。それに対して、和声はまさしく身体的
機構とでもいうべきものとなる。したがって、ベ
ートーベの「第九」のテーマに日本語の歌詞をつ
けて歌ってみても、ショパンの「別れの曲」のメ
ロディーだけを歌ってみても意外に原曲のもつ感
動は生まれてこないものである。ところが校歌の
場合は、それが歌われる機会や場所を考えれば、
自然とメロディーの顔つきを気にして作品を書く
こととなる。そのほか、“誰でも歌える音域”

“特別な訓練を受けなくとも歌える音程やリズム”

“何節かの歌詞を同じメロディーでくり返して歌
うため、アクセントや語いのまとまりに矛盾を生
じやすい”などといった制約もある。その結果、
校歌の曲調にはおのずからある種のタイプが出来
上がっていて、最も多いのは行進曲調であり、ホ
ームソング調は極めて稀である。私はどちらのタ
イプにも属することを好まなかったので、今回は
いわゆる典型的な校歌調では書かなかったつもり
である。そしてできるだけ単純であることを心が
けたので、リズムパターンの中身は部分的に3拍
子系の処があっても譜面上は四拍子に統一し、和
声は平明であるように心がけた。生徒諸君による
こんで歌ってもらえればこれにつける喜びはない。